慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	消費組合の限界（上）
Sub Title	
Author	浜田, 精一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.475(163)- 482(170)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のである。

之と相關聯する第三の場合は前渡金の割引料が貸出の初めに當つて差引かれ借受人の手取金は其債務額より少きときは公式の示す數字よりも稍大なる貸出を行ひ得る。即ち手取金は前渡金額面よりも少きが故に流出金も從つて少額である。

註、Loan Expantion とか addition to loan 等の語を使用するときは諸種の貸出金の全期間を含んで云はなければならぬ。何となれば貸出契約と小切手振出の間には多少時日の餘裕あるが爲めに其間に公式に依りて算出されたる金額よりも大なる貸出をなすことが出來ると共に其貸出期間の中程に於ては貸出預金殘高は著しく下つて居るが他の貸出金の始期又は終期に於て大なる殘高を示すが故に之と相殺平均される從つて觀察の方法を異にするときは幾分の相違を來すからである。

之を要するに準備金を構成する過程は一銀行の場合に在りては（一）預金の增加と現金の取得（二）貸出の膨脹と貸出預金の增加（三）現金の流出となるのであるが一銀行組織――一の大銀行が一國の銀行業務を獨占する場合も同じく――にありては（一）預金の增加と現金の取得（二）其數倍に亘る貸出と預金の增加の二過程を過ぐるものである。

註、一國の貸出が過度に膨脹して他國と平衡を保たざるに至れば現金の流出を來す即ち他國にして信用の膨脹其他相殺的狀況なき限り前と同じ結果を招致する。

最後にフイリップスは起り得べき反對論に對する答解をなして居る。曰く一銀行にして新準備金を收受したるときは之を減殺することなく準備金をして適當の比率を保たしむる如く貸出を行ひ得るものなりとの所說は貸出手取金に對し振出されたる小切手は他の銀行が貸出を行ひたる結果振出されたる小切手と相殺されるものなりとの觀念を出發點として居る。然れ共總べての銀行が同時に準備金を增加し又同時に同じ割合にて貸出をなしたりとすれば此所論は正しきものと云はねばならぬが一銀行組織中の現金增加は如何なる時期に於ても斯くの如く總べての銀行に對し同時に起り得べきものに非ず先づ小數銀行に流入しこれより漸次分散するの經路を辿るものである。

銀行が通常現金を收受するは（一）同僚銀行（二）銀行以外の資源――金輸入金鑛山の發見等――にして後者の場合にありては少數銀行先づ貸出を行ひ然る後に他銀行に波及し前者の場合に於ては流出金を失ひたる銀行は貸出を收縮するに至るべく其現金運動は一は求心的であり他は遠心的の傾向を有するを以て同時に貸出の增加を行ふこと能はざるは必然の理である。又貸出の收縮を必要とせざる場合――現金の流入に依る貸出――にありても、其銀行が準備金を增加せざる以前に平衡を保つ如く日々の交換所殘高が相殺されて居るならば貸出を增加し手取金が引出さるゝに至つた後よく平均を保ち得ることと難きことも明かである。

故に或狀態の下にありては貸出をなすも現金を流失せず却つて反對の要求が之を相殺するといふ論者は一銀行と銀行組織全般の動作とを混同したるものにして俄かに贊同し能はざるものである。

（一九二三年二月於名古屋）

消費組合の限界（上）

濱田精一

最近我國の物價が騰貴したきりで容易に下落しないために、一般民衆の生活は益々困難になるばかりである。從つて之れが救濟策として或は金の輸出禁止を解いて貨幣の數量を減縮せんことを唱へ、或は公設市場を設立して暴利を貪

る商人と對抗せしめやうとする者が少くない。けれども縱令、之等は實行可能であるにせよ一時的の彌縫策に過ぎない。もつと根本的に、しかも實際的に此生活難を救濟し、進んで一般民衆をして充分に生活を享樂せしめる方法はないか。是れは萬人の索めた所である。そして共產主義不可、集產主義不可と擇り分けて行く中に、最後に思ひ當つたのが消費組合である。我國でも、消費組合に關する意見は漸く此處彼處で論ぜられるに至つた。そして消費組合と名のつくものも二三十年前から少しばかり存在する。しかし社會改造と云ふ高遠な理想を有するものは殆どなく、大部分はヂード氏の所謂個人主義的消費組合に過ぎない。之れを今日既に一千四百以上の組合數を有し、組合員又四百萬を超過する英國に比すれば殆ど隔世の感がある、しかし、今後生活難の繼續と消費者の自覺とは相俟つて必ずや我國にも消費組合の健全にして有勢な發達を見る時期が來るに相違あるまい。ウェッブ氏は、英國に於ては今後百年を出でずして、有名な政治家や偉人の傳記よりも組合に關する記事が一層重要なるものとして、學校の教科書中に記載されるであらう云ふて居る。(Webb: The Consumers' Co-operative Movement p. 383)

私は今此處で組合の組織や原則に關して記述しやうとするのではない。勿論、之等は組合の發展能力の根本的原動力ではあるが、しかし之れに關する記述は組合を論ずる書の必ず記載する所であり、又、意見の一致する所であり、何等其著者の獨創力(Originality)を見出し得ないのである。しかし消費組合の發展能力は如何なるものであるか。それは、凡ての產業凡ての階級に行はれ得るものであるか。それとも或特種の產業或特種の階級に限られるものであるかと云ふ問題、從つて社會改造能力の有無大小に關する議論は、其論者の個性及信奉の程度の最もよく表はれる所であり、又既に消費組合の概念を會得せるものには可也興味を換起するであらうと思ふ。

私が次に述べやうと思ふのも此限界問題であるが、未だ研究の日の淺いのと、經濟に關する知識の充分には備つてゐないために、獨斷に趨つた點が少からず見出されるであらうが、それは大方の叱正を仰ぎたい積りである。

先づ私は此限界を研究する前に、最近消費組合の人員及賣上高は英國に於て如何なる程度で增加してゐるかを參考迄に述べやうと思ふ。

抑も此運動が一八四四年ロッチデール(Rochdale)に其基礎を築いてから未だ八十年にはならないのである。

然るに今日英國に於ては全人口四千六百萬人中約一千二百萬人は消費組合に加入してゐる。(何となれば現在組合員數約四百萬で、一家族三人と見れば上述の如き計算となるからである。)即ち、四家族毎に一家族の消費組合員戶主が存在することになる。一九一一年ダルハム(Durham)に於ては一個半家族毎に組合員一家族の割合であつて、ヨークシャ(Yorkshire)とランカシャ(Lancashire)とに於ては、二家族毎に一組合員戶主が存在する割合である。其增加率に關しては、一九一四年には十七萬六千七百五十人で、此割合を以て進んだならば、六年毎に壹百萬の組合員を增加することになる。消費組合の販賣高は、年一億磅で、一九一三年よりも一九一四年には八百萬磅だけ增加してゐるのである。しかし組合員や販賣高を表はす數字の大きい事や、其增加率の速いことのみでは、直ちに以て組合將來の發展を卜する資料とはなし難

い。消費組合を構成するを得る組合員の資格及組合の産業上に於ける活動の性質をも充分研究して見なければならない。

（甲）人的限界　組合は消費者を基本とする産業上の民主組織である。消費者に對しては自由平等門戸開放を以て其任務とせねばならぬ。人間である以上如何なる階級如何なる身分に屬するとを問はず、其主義主張に拘はらず、消費することなしに生存することが出來ない。從つて、消費組合は人類全般を代表する組合であつて決して此階級又は彼の階級を代表すべきものではない。嚴正中立相互扶助は組合の本旨である。本位田祥男氏が「凡ての人が消費者である點のみを高調するのは正しい議論では無い。夫は消費組合事業の內容を見れば明白になるであらう。消費組合の目的は利潤を廢止する所にあるから、利潤廢止によつて利益を得る者には消費組合は最もよき味方であり、利潤廢止によつて損失を蒙る者にとつては最も恐るべき敵であらねばならぬ。而して今日の階級は利潤によりて利益を得ると否とによつて區別されてゐるから、消費組合は今日の階級と決して無關心であることは出來ない。一方には其味方となり他方には其敵とならざるを得ない」と述べてゐる。（本位田祥男氏消費組合運動二四二頁）此議論は一應當を得たやうであるが、然らば利潤の廢止によつて損失を蒙る者は消費者ではなからうか。資本家或は企業家が消費者としての資格は、勞働者の消費者としての資格と離隔する所があらうか。のみならず今迄組合は資本を排斥し或は組合に資本の集積した場合に之が處分法に困つてゐたのであるが、最近此の反動が生じて縱令資本の長所と云ふことは出來ないとしても、資本の便益を認めるに至つた。之れは組合が生

産や住宅建築に從事するに至つた爲めである。故に若し株式の多數に應募せんとする資本家がある場合には之れを阻止しやうとはしないのである。斯くして彼等資本家の利益が消費組合のために冒されて大規模の資本家産業に資本を投ずることが出來なくなつても、尙組合に資本を投ずる道が開けて居る。勿論、組合に於ては利子は一定せられ且比較的率が低い。しかし一定確實なること公債に投資したと異らない便益もある。是れ組合が消費のために生産するのであるから資本家制度のやうに恐慌に襲はれることが殆ど無いからである。組合が資本の便益を認めるやうになつたと云ふ事を聞くと或者は直ちに此は資本の勝利であり組合が資本主義に墮落したものであると述べるであらう。しかし、組合に於ては資本は産業の支配的權力も持たなければ、利潤の分前を決定する權利も無いから、其侵入は何等恐れるに足らない。若し彼等資本家が惡意を生じ、脫退と共に彼等の資本を取り去ることによつて組合を困惑せしめる恐れがあるなら、組合の株金拂戻の規則に適當な條件を附して其危險を免れることが出來るであらう。上述の如くにして資本家は消費者として組合によつて代表せられ得る資格を有してゐるばかりでなく、彼の組合に投資する道さへ開けてゐるのである。之を資本家制度の崩壞、資本家の沒落、勞働階級の支配と云ふ所謂マルクスが英國議會政治の故智に學んで案出した階級鬪爭と全然同一視するのは少し過分な論調ではなからうか。ウルフ氏（L. S. Woolf）は「サンヂカリズムが勝利を得れば世界は一階級が他の階級に勝利を獲ることを見るであらう。しかし消費組合運動の勝利は階級鬪爭或は階級の勝利とは何等の關係がない。

單にそれは階級利益の調和一致を意味するものである」と云ふてゐる。(Woolf: Co-operation and the Future of Industry p. 64) 更に私は此を證明するために、ソンニクセン氏の言を引用するに「無論、組合主義者と社會主義者とは共に凡ての產業界の害惡を同一原因に歸してゐる。同一原因とは私利的制度である。資本主義の批判と云ふ破壞的事業に於ては兩者は互に提携することが出來る。

然かし其建設方面の事業になると彼等の行く道は岐れて了ふ(中略)。一九一〇年コペンハーゲンに開設の社會主義者の國際會議は、消費組合を是認する旨の決議案を可決し、凡ての社會主義者をして消費組合に加入せんことを德遵し、消費組合を『階級鬪爭を行ふに際し勞働階級の有する一つの有力なる武器となるもの』と認めた。恰も之れと時を同じうして漢堡に開かれてゐた國際組合會議は、此コペンハーゲンより前記決議の旨の通報に接するや、之に對し『政策には少しも言及することなくして』唯感謝の意のみを表せんことを議決した。但し社會主義を是認することは其時は勿論のこと三年後グラスゴーでの會議の時にも議決しなかつた。果して消費組合はかのマルクス一派の社會主義の根本教訓たる階級鬪爭を是認しないのであらうか。然り、斷じて是認しないのである」と云ひ、其理由として、「消費組合運動者としての見地より云へば、組合の產業制度と資本家の產業制度との間には明瞭な鬱隙がある。然し之れは何も階級對階級の鬪爭ではない。先づ第一に消費者は階級をなしてゐない。個性を消費者の團體に引寄せる個人的利害の念は、社會の各員の等しく强く感ずる念慮である。若し未だ之れに加入せざる群集があるとせば、それは組合に關する智識の未だ充分普及せざるためである。尤も一方には自己の特種の階級的利益又は特權に重きを置き過ぎる人もある。然し要するに消費者としての利害關係は、普遍的なものである。凡ての人を包攝するものである。其廣汎なることは地球の廣さと同じである」と云つてゐる。(協調會、「消費組合論」二四九——二五〇頁)

然らば、今日迄消費組合を構成して來た階級は何れの階級であるかと云へば、勞働階級の人々である。ウルフ氏の言を藉りて云へば、「閑暇あり裕福なる階級や、年貳百磅以上を取る中流及自由職業の階級は」之に加入して居ない。若し彼等が今日消費組合と名のつくものを形成してゐると云ふならば、それは眞の意味の消費組合ではなくて、資本主義的會社の性質を有するヂード氏の所謂個人主義的消費組合である。私は斯かる組織をも消費組合の中に數へることを好まない。しかし此儘で若し上流中流階級をも之れに加入せしめることが出來ないものとしたならば、全消費者を代表すると云ふ組合の最も重要なる原則は虛僞であり、空文であり、從つて大規模に產業問題を解決する望がないことになる。何となれば例へば英國について云へば、現在之に加入してゐる勞働者の平均收入は、一週間に付、三磅以下、否恐らく二磅より多いことがなからう。從つて此運動が英國全收入の甚だ小部分を取扱ふに過ぎない。單に斯かる薄給者を包含するに過ぎない間は其組合員の使用物を供給するに過ぎない所の組合產業の範圍は、國家全產業に比較して常に少額に止まるであらうからである。それなら何故に上流中流階級が之れに加入しないのであるか。之れに對して、ウルフ氏は第一には、此運動は最初勞働階級に訴へただけで、上流中流階級には訴へなつたからであると言ひ、第二には資本家階級の心理上の原因に歸してゐる。(Woolf: Co-operation and the Future of Industry pp. 101-102 參照) 私は大體之れに基いて說明しやうと思ふ。

先づ第一の原因から述べる。最初ロッチデール組合が勞働者によつて設立せられた。又、此運

動が今迄其主義として廣告をしたり宣傳をしたりして加入を勸誘することはなつた。又其必要もなかつたのである。何となれば、今日に至る迄、勞働者間には此運動が擴張せられる畑は非常に大きくて、組合は何等の骨折なくして成長したからである。若し何等かの方法によつて組合の本質を知らせたならば、上流中流――少くとも中流階級が之に喜んで加入しないことはなからう。大規模産業の發達、産業集中制度の進歩と共に、中流階級が次第に壓迫せられ、益々生活に困難を感じて來るばかりである。此生活難を救ふ唯一の道は消費組合員となることである。中流階級中でも、最初之れに加入するのは俸給取り、並びに自由職業者等で、かくして得意を失ふ所の小賣商等は、組合企業に壓倒され、遂には彼等の商賣を投げ出して、組合に加入するか、資本家制度の勞働者となるか、何れかの道を選ばねばならない。しかし、彼にして理性を有する以上は組合に加入する道を選ぶに違ない。又、假令階級的觀念が強くて、資本家企業の下に走らうとしても、得意の殆んど大部を失つた資本家企業は、事業縮小のために、彼等の大部を收容することが出來ないから、結局は小賣商人等も、組合員となるより他にない。今日既に組合に壓倒された商人等が、何時の間にか組合の支配人又は店員となつてゐる側は少くない。斯樣に中流階級消費者が、自覺して組合員となると、又余議なく組合員となることを問はず、殘りの少數の資本家等は、彼等の生産品の捌け口がなくなるから、事業を繼續することが出來ない樣になり、從つて投資する道も無くなり、收入の道がなくなるから、此まゝ行けば破産の他ない。剩さへ生活必要品も組合以外からは得ることが困難になるから、一方に於て彼の資本を少しでも有利に使用するために、組合員とならざるを得ないこととなるのである。但し、彼が幾株を持たうとも組合の一人一票主義には少しも變りのないことは勿論である。（未完）

新刊紹介

社會學概論

高田保馬著

岩波書店刊行
菊版六一〇頁
定價三圓五十錢

近來世運の變遷と共に、社會的なる諸問題に關する論議は非常の勢を以て增加し、所謂汗牛充棟の言葉を以て、形容するとしても、敢えて過言とは云ひ得ない。然るに社會そのものに關する研究、即ち社會學の研究は寥々たる觀なきを得ない。この時に當り先きには、千數百頁に上る「社會學原理」「現代社會の諸研究」「社會と國家」等を、今は六百頁に余る「社會學概論」を出して、我が社會學界の寂寞を破ぶる者は、文學博士高田保馬氏である。

今こゝに紹介せんとする「社會學概論」は第一篇社會學、第二篇社會の形成、第三篇社會の相互關係、第四篇社會の結論を論じてゐる。著者はその執筆の動機を次の如く語つてゐる。「私の社會學に關する考は以前『社會學原理』を書いた時と今と別に著しく變つては居ない。然れども此書は前著の縮約と見るべきものに非ず、一の新なる著述である。私は當初簡潔なる書き物に於て自分の社會學組織を新に表現したいと考へて筆を執つた、其の動機は三ある。第一前著において僅に一部分より示さゞりし所の社會學方法論に關する私見を少くも、其の概略なりと表示せむが爲。第二、前著に於て餘りなる紙數の增加により省略したる二三の問題をも取扱はむが爲。第三、社會學の問題の設定、又は種々なる內容に關する點に於て前著を公にしたる後に多少變化したる自分の見解を明にせんが爲。」と。さうして著者は、その社會學方法論に其の主力を注ぎたるが如くである。（序文）

著者は先づ科學を分類して、普遍化的科學と個別化的科學とにしてゐるが、この區別は自然科學と歷史學との區別である。換言すれば、價値に關係するか否かの區別である。然も價値に